

ジャッカ・ドフニ

大切なものを収める家

ーサハリン少数民族ウイльтаと「出会う」

め
い
と楽しむ 21 冊

1

『ラディカル・オーラル・ヒストリー
オーストラリア先住民アボリジニの
歴史実践』

保莉 実 (著), 岩波書店

オーストラリア先住民のように、文字を
もたない人たちの歴史を歴史学は歴史
と認めるのか。Doing History (歴史実
践) の言葉を世に広く知らしめ、「人生
なるようにしか、ならない。などと言っ
て、シニカルになっている暇などない」
と短い人生を前向きに駆け抜けた著者
が、私たちに残してくれた。

2

『帝国法制秩序と樺太先住民
植民地法における「日本国民」の定義』
加藤 絢子 (著), 九州大学出版会

本人たちの知らないところで、物事が
決められ、好むと好まざるとに関わらず、
日本やロシアといった国の方針に巻き
込まれていった樺太先住民たち。都合
のよいときは皇民と、そうでないときは
日本国民ではないと翻弄されつづける。
樺太先住民がどのように位置づけられ
ていたのか関連する法制度を丹念にさ
らった労作。

3

『流れのほとり』 (福音館文庫)
神沢 利子 (著) 瀬川 康男 (イラスト),
福音館書店

児童文学作家の神沢利子さんの自伝的
小説。少女時代を樺太で過ごし、ウイル
タの暮らすオタスの杜を訪ねた経験も
エピソードに含まれている。主人公は
オタスではウイルタやニブフの子供た
ちに出会い、私もオタスの子になりた
いと思う。戦後数十年たって著者とウ
イルタの北川アイ子さんが邂逅し、お互
いに当時を懐かしむ姿があった。

4

『ケヴォングの嫁取り
サハリン・ニブフの物語』
田原 佑子 (訳) サンギウラジーミル・ミハ
イロヴィチ (著), 群像社

著者のウラジーミル・サンギは、Ch. タ
クサミと並ぶニブフの知識人の一人で、
ニブフの伝統文化の保存や、地位向上に
力を尽くしてきた。ケヴォングとはニブ
フの氏族名のひとつである。ニブフの
社会は氏族を単位とした制度によって
支えられてきた。サンギの著作を多数
訳してきた田原佑子が翻訳を務める。

5

『北のモノ・コト・ヒト
ことばと博物館の出会い』
津曲 敏郎 (著), 北海道大学出版会

長年ウデヘ語、満洲語、ウイルタ語と
いったツングース諸語について研究を
してきた言語学者の著作集。ツングー
ス諸語の多くは話者が極めて少ない危
機言語でもある。映画「デルス・ウザー
ラ」に現れる言葉からデルスが何語を話
していたのかを考察するなど、言葉か
ら北方諸民族文化を多彩に紹介する。

6

『北方を旅する
人文学でめぐる九日間
北大文学研究科ライブラリ 2』
北村 清彦 (編著), 北海道大学出版会
北海道大学文学部・文学研究科の教員
が9日間の北方の旅にでかけるという
設定のもと、アイヌ語とニブフ語、鳥居
龍蔵と東アジア等、9つのテーマを紹
介してゆく。

7

『ウイルタ語辞典』
池上 二良 (編), 北海道大学出版会

ウイルタ語研究に生涯をささげた、言
語学者池上二良氏が編纂したウイルタ
語辞典。緻密な研究から得た膨大な言
語資料がもとになっている。豊富な用
例のなかには、ウイルタ文化の特徴を
見せるものも多く、ウイルタ文化を知り
たい人には一番に勧めたい。

8

『トナカイ王
北方先住民のサハリン史』
Vishnevskii Nikolai (著) 小山内 道子 (訳),
成文社

サハ (ヤクート) のウイノクロフは、ロ
シアからサハの独立を目論む活動家で
あった。日本政府にその支援を求め、
昭和初期にはサハリンの日露国境を越
境する。日本領のオタスに洋館を構え、
トナカイ王として東京までも名をとどろ
かせた。

9

『辺境から眺める【新装版】
アイヌが経験する近代』

テッサ・モーリス＝鈴木（著） 大川 正彦
（翻訳）、みすず書房

先住民、特にアイヌに対し国家が何を
してきたのかを検討する。ウイルタの
北川アイ子さんとの対話は著者に重た
い感動を与えている。表紙はジャッカ・
ドフニ所蔵のウイルタの切り絵文様イル
ガ。このイルガは当初無断掲載であり、
先住民をテーマにする著作ですらこの
ような問題を引き起こすことに、ある種
の根深さを感じざるをえない。

10

『オホーツクの灯り
樺太、先祖からの村に生まれて』

安部 洋子（著） 橋田 欣典（編集）、クルーズ
どの人も、それぞれに大変なことがあり
比べることなどはできない。それでもサ
ハリンアイヌの人たちが被ったことにつ
いては、その深刻さを意識しないわけ
にはいかない。故郷に誰ひとり暮らす
ことができないことを、どうつづなって
ゆけばよいのだろうか。

11

『樺太アイヌ民族誌
その生活と世界観』

大貫 恵美子（著） 阪口 諒（訳）、青土社
サハリンから日本に移住したサハリンアイ
ヌの女性の1960年代の聞き取りをもと
にした研究書。インフォーマントがシャ
マンであったこと、女性研究者による
調査の点であることも特徴である。原作
は英文であり、翻訳者の熱意によりよう
やく日本語で読むことができるように
なった。

12

『服部健著作集
ギリヤーク研究論集』

服部 健（著）、北海道出版企画センター
ギリヤーク（ニブフ）語研究者の著作集。
著者は戦前にオタスを訪れ、またオタ
ス住民を札幌に呼び寄せるなどして、
言語調査を続けてきた。言語調査とは
いえ、民族誌にあたる部分も多く、さま
ざまな角度から検討されていることが
わかる。

13

『日本帝国の膨張と縮小
シベリア出兵とサハリン・樺太』

原 暉之／兎内 勇津流／竹野 学／池田 裕
子（編著）、北海道大学出版会
日露戦争後のポーツマス条約でサハリ
ン島の北緯50度に国境が引かれたと
いっても、サハリン島が平和であった
わけではなく、日本がサハリン北部を
占領した時期があり、この時期につい
てまとめられている。なかでも、オタス
設立とウイノクロフとの関係を考察する
田村将人の「1920年代のサハリン先住
民族の移動と国境の関係性」が必読

14

『一九世紀後半における
国際関係の変容と国境の形成
琉球・樺太・千島・「竹島」・小笠原』

麓 慎一（著）、山川出版社
日本と国境の関係について日本近代史・
アイヌ史を専門とする著者が考察する。

15

『藤山一雄の博物館芸術
満洲国国立中央博物館副館長の夢』

犬塚 康博（著）、共同文化社
満洲国国立中央博物館副館長であった
藤山一雄がめざした、新しい博物館の
活動を紹介する。満洲にあった博物館、
図書館が今の日本の博物館、図書館に
影響を与えていることを知る人は少な
いだろう。著者の犬塚康博は、一時
ジャッカ・ドフニの運営委員を務める。

16

『サハリンに残された日本語樺太方言』
朝日 祥之／真田 信治（著）、明治書院

日本領に暮らすことになった樺太先住
民は、日本語を話すようになる。これ
を日本語樺太方言とみなして、著者は
研究を開始する。言葉の通じない民族
間にあって、オタスでは日本語が共通
言語となっていた。

17

『北のことばフィールド・ノート 18の言語と文化』

津曲 敏郎（編著），北海道大学出版会

北方言語研究は意外にも日本人研究者層が厚い。著者の多くは現在も第一線で活躍する言語学者たち。赴くだけでも困難の多い、環北太平洋各地に散らばる言語に果敢に挑もうとする20年前の若き言語学者たちの抱負も読み取れる。言語学の重鎮 宮岡伯人は、著者たちを「憑かれたようにことばの深みを究めようとしてきているフィールドワーカーである」とまとめる。

18

『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ 一九四五年―一九四七年』

Savel'eva, Elena Ivanovna / 中山 大将 / 天野 尚樹 / サハリン・樺太史研究会 / サヴェーリエヴァ エレーナ・I. (著) サハリン樺太史研究会（監修） 小山内 道子（訳），成文社

1945年8月にソ連軍が国境を越えたあと、サハリン島はどうなったのだろう。終戦直後のサハリンと千島列島は約1年半にわたり民生局が統治する。1946年

には日本語地名はロシア語名に変更され、急速にソ連化がすすめられた。そのなかで、サハリン島の先住民たちは1905年に島内に国境が引かれたときと同様、存在を等閑視されたのである。

19

『1Q84』（文庫版全6巻）

村上 春樹（著），新潮社

ロシアの作家チーホフは、19世紀末にサハリン島に赴く。一体何が、彼をサハリンへ向かわせたのか。現地では大量の住民調査カードを書きのこし、なかで先住民であるニブフ（旧称ギリヤーク）にも出会う。それが1Q84で登場人物が読むチーホフの『サハリン島』である。

20

『世界を文学でどう描けるか』

黒川 創（著），図書出版みぎわ

本書は、著者のサハリンへの旅、そして網走に在住だったジャッカ・ドフニ館長 北川アイ子さんとの交流についても、多くの紙幅が割かれている。アイ子

さんの個人史を締めくくりとして、著者は問う、「私は、創作で、何かを伝えることができるだろうか」。素朴にして大きな問いと格闘する著者の真摯な態度が深い洞察へと読者を誘う。

21

『民族衣装を着なかったアイヌ 北の女たちから伝えられたこと』

瀧口 夕美（著），SURE

著者の瀧口さんは北海道阿寒出身。阿寒は北海道のなかでアイヌ文化を体験できる観光地のひとつである。土産品店を営む両親と暮らし、自らのアイデンティティを探る日々。幼い頃から親しんだウイルタの北川アイ子さんとの対話に戸惑う著者の姿には、先住民とひとくくりにできない個人史が浮かびあがる。

展示情報

ジャッカ・ドフニ

大切なものを取める家
ーサハリン少数民族ウイルタと「出会う」

2024年3月16日(土) - 8月25日(日)

10:30 - 19:30 入館無料

高島屋史料館TOKYO 4階展示室

関連展示

新田樹写真展 雪

2024年5月25日(土) - 8月25日(日)

10:30 - 19:30 入館無料

高島屋史料館TOKYO 5階旧貴賓室

休館 月・火曜(祝日の場合は開館)、
8月21日(全館休業)

東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C. 本館



丸善日本橋店から
高島屋史料館TOKYOへのアクセス
中央通りを挟んで向かいの建物です。

